

“音を聴き合う場”がもたらす運動協調 ーグループ・レッスンにおける児童たちの音楽的発達を記述する試みー

日本音楽教育学会第43回大会
2012年10月8日
丸山 慎・小川純一・滝山聖士※
(*公立はこだて未来大学)

1. はじめに

初めて手にする楽器の演奏技術を学ぶとき、音楽の先行経験や他者とのアンサンブル活動は、学習者にどのような影響を与えるのだろうか。このような問題について検討するため、筆者らは、「ヤマハじゅにあ管弦打アンサンブル1」という児童のための器楽のグループ・レッスンを対象に縦断的観察およびアンケート調査を実施し、その回答内容の分析やビデオ映像にみられる行動上の変化を記述することによって、器楽の学習過程について検討してきた。その結果、レッスンの場と時間を共有する同世代の他の児童の存在が、器楽演奏を学習する過程での重要な学びのリソースとなっている可能性を指摘した。

本研究では、さらにこのレッスンの音楽的な効果について分析を深めることを目的として、児童たちの“演奏上の変化”を評価する方法について検討した。そのひとつの試みとして、レッスンのビデオ映像に記録された音声データを使用し、彼らが奏でた音の高さ(ピッチ)の周波数成分の分析を行った。そして、その安定性を指標をとしながら、グループ・レッスンが児童たちにもたらしていたであろう音楽的な効果について議論した。

2. 実践の概要

本研究では、2名の講師がそれぞれに担当したバイオリンのクラス(1クラス3~7名)のデータを分析対象とした。受講者は、ヤマハ音楽教室においてピアノ・エレクトーンを用いた総合的な音楽教育を受けている児童のグループと一般児童のグループ(ただし学校の部活動や個人で楽器経験があった者もいた)であった。

3. 分析と考察

本研究では、レッスンで使用した楽曲のなかで、左手の運指がやや難しいと思われる箇所を中心に分析を行った。その結果、バイオリンの経験者が参加していたクラスの場合には、次第にひとつの音高に収束していく傾向が見られたのに対し、全員が初学者のクラスの場合には、音高の乱れはなかなか修正されないという傾向が見られた。これは、グループのなかに安定した聴覚的な手掛かり(=音高)が存在すると、他の児童たちの奏でる音の高さも、その周辺に自ずと収束するように指の運動が制御されていったということの意味する。つまりグループ・レッスンのなかで他者の音を聴くという知覚的な経験は、自身の運動(=身体的な側面)を協調させるような、いわば「知覚と運動の循環」を生じさせていたということができるのである。

謝辞: 本研究にご協力いただいたレッスンの受講生と保護者の皆様に深く御礼申し上げます。誠に有難うございました。

注

1) このレッスンは、ヤマハ音楽教室の総合的な音楽教育の基本姿勢と成果を基盤にし、児童期における器楽の導入教育として開講された新たな試みである。なお本研究に関連する研究成果の一部は、「日本教育心理学会第52回総会」および「第23回日本発達心理学会大会」において発表している。